希望とは－希い望むこと－

近藤良樹

キーワード[希望・期待・絶望・希う・望む]

１．「水を希望します」とは？

（**生理的欲求などではなく、社会的な要求**）「水を希望します」という。これは、水を観望しての知的理解や美的な評価ではなく、おそらくは水を求めての意志表明と受け取られるであろう。「水」を求めるとき、その要求や欲求は、多様な形をとる。「水が欲しい」「求める」「願う」等という。「希望」は、それらと置き換えできそうであるが、「希望する」のは、単に「欲しい」というのではない。「水がほしい」という場面では、「飲みたい」という生理的な欲求がまず想起される。これに対して「水を希望する」のは、それ自体は直接的には飲みたいという欲求を表明するわけではない。ひとりでいる場合、独り言して、「水が飲みたい、欲しい」といってもいいが、「希望する」とは言わない。希望するのは、水を用意してくれる相手があってというのが一般的であろう。「誰かに」水を希望するのである。

「水が欲しい」ということで満たされるのは、のどの渇き、いわば動物としての欲求である。これに対して、「希望が叶えられる」場合、その充足では、生理的な欲求は問われることはなく、前面に出ているのは、社会的な満足であろう。自分の求めをだれかに、担当の者等に聞き入れてもらえたということである。自分の願いが尊重され、しっかりと応答してもらえたということに満足するのであろう。

（**対社会的なものとしての希望**）「水を希望する」のは、「水を、誰かに、希望する」のであり、その誰かを前にしての発言であろう。その誰かは、目的としての水について、これをもたらす媒介的な立場にあるひとである。この、水を準備してくれる社会的な役割を担う者に、「水を自分の手もとにもってきてくれること」を乞い求めるのが「希望する」ことであろう。厳密にいうと「水」ではなく、「水をもってくること」を希望するのである。希望は、社会的な要求・要請の一形式になろう。「水が欲しい、飲みたい」のは生理的主体であるが、これを「希望する」のは社会的対人的主体になる。「水がほしい」という言葉にその担い手を指す「誰に」の入る余地はない。だが、「水を希望する」場合、間接目的語を入れて「水を（もってきてくれることを）、給仕係に、希望する」という。この「誰に」と乞い願う契機が希望の特徴をなす。

ほしがる生理的欲求と、「希望」は、その欲求の成層を別にしていて、希望は、高度の知的社会的な人格相互の営みに見られるものである。社会的な生の営みをリードしコントロールす

る知性と意志のもとに機能している、対人的、対社会的な要求のあり方のひとつとしてあるのが希望になる。希望の目的をめざし、それを実現する手段となるものに働きかけて、その担い手や支持者に対して依頼するのが希望であろう。希望は、欲求実現のための手段・媒介となる者に、欲求するものを請い求めるのである。

（**一方的な要求ではなく、慮りのある依頼**）希望する者は、その関与する人に、その希望内容を望み求め希う。その姿勢は、強引に押し付けてこれを強要したり、強圧的に命令するような要求の仕方ではないし、相手の意向など顧慮することなく一方的に我意を主張するものでもない。希望は、希（こいねが）うのである。「希う」のは、「乞う」ことであり、「願う」ことであろう。「乞う」のは、価値あるものを自分にもたらしてほしい、振り向けてほしいと、その実現に力ある相手に対して、身をひくくして、これを頼み、頼りにすることであろう。「願う」のも、同様で、希望の内容について、その実現を求め念じて思いつづけるのである。念願の実現をその能力ある相手に頼み求め続ける、乞い願う態度を、希望は、その「希」においてもつ。

「ダイヤモンドを希望します」というのは、これを「要求します」と自分勝手な我意を表して、一方的に権利主張をしているのではない。これを「希望する」のは、自分のダイヤ所有への欲望を踏まえ、その所有への権利を踏まえつつ、この欲望実現について、その相手に対して、穏やかに配慮ある依頼をするのであり、これを許して欲しいと許可を請い、実現に努力してもらいたいとお願いするのである。

（**自らに叶えようとする意志でもある**）「ダイヤが希望です」という言表では、だれかひとにお願いする場面よりは、希望する者自身が自らに懸命に働いて、望みのダイヤを購入するような場面が想起されるかもしれない。人生の大きな希望は、多くが自身で叶えていくものである。「希望の大学」、「希望の仕事」等、各人の希望は、各人が自らに切り開いていく。

期待と希望のちがうところである。期待は、傍観的であるが、希望は、主体的実践的である。「教師になることを期待しています」という場合、教師になるのは、自分ではない。期待する者は、傍観するのみである。だが、これを「希望しています」という場合は、教師になるのは自分である。傍観し待ち望むだけの期待とちがい、希望は、実践的で、未来に描いたその目的を自らに叶えて行こうとする意志・意欲である。

ただし、もっぱらに自分だけでと思われるようなものも、たとえば入試の「希望の大学」について、これを自分だけで決めたとしても、それを「志望」とせず、「希望」というかぎりは、だれかに希望している面をもつ。親に許可を求めていたり、手間のかかる書類作りをしてくれる高校の先生にそうお願いするものでもあろう。もちろん、当の大学に対しても希う姿勢をもつ。そういう気持ちをうちに含んでの「希望」であろう。

（**現実的で分をわきまえた意欲**）希望は、希い、身を低くしてだれかに向けられるのであれば、その内容はこの相手に受け入れ可能なもので、具体的になっている必要がある。曖昧模糊とし

ていることも多い願望とか夢とちがい、希望は、目的意識は明確で、それを依頼したい相手もそれに応じてはっきりしているのがふつうであろう。はじめにあげた「水の希望」にしても、水という目的はもちろん、その相手も明確である。

自分の希望の対象は、希な望みである点では、最高の価値あるものであるが、客観的に最高の夢をえがくのではない。その相手に希っても大丈夫であることをふまえ、おのれに実現可能なものをふまえてのこととなる。自他の能力・分限を周知しての現実的な望みである。自身の実現可能な最高のものが希望の目的となる。宝石店に行って「希望の品」として指差すのは、その店で最高級のダイヤではない。自分が購入できる最高のものにと限定していて、客観的には低価格の真珠などとなる。それが希望である。希望は、自身にとって「希」有の「望」みであるが、分相応の実現可能な現実的なものを「希（こいねが）」い「望」むものである。希望は、自己規制に富み、周囲を慮る。

「希望」は、実現可能な高い価値あるものを、ひとに希い、自身もその実現に努めるものとして、つぎのようにこれを定義しておけようか。「希望とは、自身にとって現実的に可能な高い（しばしば希有の）価値ある人間的な営み（或いは、そこにもたらされる価値物）について、これをひとに頼み希い、かつ、自らもその実現に努めこれを望みつづけることである。」

（高貴な感情でもある）希望は、可能な未来への意志・意欲であるとともに、つらい絶望感の対極に位置するさわやかな感情でもある。陰鬱な絶望の感情状態から解放されたときにいだく希望においては、特に、心身は軽やかで生の躍動感に満ち心地よい感情をともなう。だが、絶望感とちがい、感情としてそれ自体を自覚できるまでになることは多くはない。「胸をふくらませる」とか「燃える」といわれるような希望は、それこそ希有な望みであって、湿り気のある希望（遭難で生存の希望が残っている場合など）では、燃えることはできない。

感情は、ひとの動物的下位層から、高貴な知的精神の層までを快不快で貫いているが、希望は、幸福感とともに、精神の最高位層に位置する快系列の感情である。動物的下位層の中心になる食欲と性欲の場合、快自体が目的となり、この快感情にひとも誘惑されがちであるが、人間の知的社会的生活に固有の感情、いわゆる喜怒哀楽になると、もう、快は、伴うだけのもので目的とはならない。喜びでは、その快感情自体は目的ではなく、価値物の獲得が目的である。さらに上位の、個別的な現在の時空を超越した、その人間的生の全体を反省・総括し指針を出していく精神のレベルになると、それが、過去や現在を想っての幸福感や、未来に向けて人生を描く希望になるが、快は、ささやかで、「自分の半生は、恵まれていて幸福だった」と反省し総括しても、幸福の快感情がともなわないことも少なくない。希望もそうである。

しかも、下位層の不快（をもたらす事柄）は、それが高貴な精神の幸福や希望の有効な手段となるのであれば、避けられることがなく、その不快・苦痛において精神は、充実感をいだくことにもなる。恵みに満たされた幸福とちがって、希望は、不満足・不快をうちにもつ精神の

快である。希望は、その目的とするものに関して現在は無・不充足であり、欲求は不満な状態にある。しかも、現在はそれの達成に向けて手段としての苦労を背負っている。未来の希望の達成への有意義な現在という意味づけにおいて、希望は、苦しい心身の現在のもとに、充実した精神的な心地よさをもつ。逆に、精神の不快、つまり不幸や絶望は、下位層の快を無意味なものとし、真にはひとを楽しませず、ときには快自体を感じさせなくもしてしまう。日頃は、人生の根本の危機ではないので、「甘いものには弱くて」などと動物的快感情にながされているが、どんなに美味のケーキであっても、猛毒が混入されていると知ったら食欲すら失ってしまう。難破船のなかで豚は喜々として餌をあさるが、ひとは、蒼白になって失われそうな未来にうちひしがれる。ひとは、動物ではなく、その高貴な知的精神において生きる存在である。精神の根本的な絶望は、やがては肉体をも蝕んでいく。絶望するのは人間のみである。したがってまた、希望があるのも人間のみである。希望は、動物には不可能な高貴な精神の営みであり（少なくとも日本語では、「希望」や「絶望」を動物には想定しない）、未来に向かう精神のさわやかな快感情になるが、なによりも、それは、ひとの未来を切り開きその人間らしい現在をつくる高貴な意志・意欲である。

２.「ａ（W）を、Ｐに、希望する」

希望は、「何かを」希望する。希望する者の希い望みもとめる高い（希有の）価値あるものをその直接目的語としてもつ。かつ、他方では、それをめぐって、「誰かに」希っていくのであって、いわゆる間接目的語をもつといってよい。希望の表現を、さきの「水を希望します」でいえば、「水（W）を持ってきてくれること（ａ）を、給仕係り（Ｐ）に、希望する」ということになる。つまり、希望は、「ａ（W）を、Ｐに、希望する」という形に一般化することができる。

（**Wではなく、厳密には、ａ（W)**）希望の目的対象として目立つのは、Wつまり、「水」とか「ダイヤ」という価値物である。だが、厳密には、Wは、希望の対象そのものではないというべきである。希望するのは、直接的には、（Wを目的語とする）ａである。Ｐというひとに対して望むもの・希望するものは、ａという人為であろう。「水を希望する」場合、Wつまり水が求めるもので価値あるものになっているのだとしても、その価値は、生理的欲求にとって価値があるのであって、希望そのものの直接の対象・求めるものは、ａつまり、水を配給してくれる人の行為である。

「汚物（W）を除去してくれること（ａ）をＰに希望する」、「暴力（W）を振るわないこと・取り締まること（ａ）をＰに希望する」ということが可能だが、これらの希望の場合、そのW、つまり汚物や暴力を望むことはありえない。希う希望の直接の対象＝目的は、Wではなく、ａにある。希う相手Ｐの態度や行為、ないしは希望者自身のあり方・行為としてのａである。こ

の（Wを目的語とする）ａは、希望では、つねに価値ある事柄であって、Wのように反価値であることはありえない。ａが反価値である場合、たとえば、「汚物をまきちらすこと」「暴力をふるうこと」は、これを希望することはない。かりにそれを希望の対象にするとしたら、それは、その反価値の行為が敵にむかっていて、希望する者自身には、やはり価値あることとなっているのである。希望の対象は、（Wを目的語とする）ａであり、このａは、希望する者自身にとっては、常に望ましいもの、価値あるものとなっているはずである。

（周知のものでは、Wのみに）だが、「弁護士（W）を希望しています」というように、日本語ではしばしば希望の直接目的語として、望んでいる価値物をあげる。希望の対象が人為ａ（Wを内にもつａ）だということは一般化されるものではないようにも思える。しかし、「弁護士を希望しています」という発言だけを聞いて、「弁護士ぐらいが、結婚相手には一番と、これを希望しています」と知ることができるであろうか。「Wが希望です（Wを希望します）」とするのは、あくまでも、その会話で、ａが自明で省略できることになっているからであろう。希望する場面は、ひととひととの関わり合いの場になって多くの自明の前提をもち、自明のことは、省略することにと傾く。さらに、人為ａは、とくにその人為の主体が希望の相手Ｐである場合には(このひとに請い願うのであるから遠慮気味となり)、直接にではなく控え目に婉曲に語るか、できれば省略したいと思うことになる。結果、ａを略して、Wのみを示し、かつ、このWが多くの場合、価値物になるので、Wをもって希望の価値対象そのものであるかのように表現することになるのではないか。

さらに、希望の対象がａのはずなのにWとなることが多いのは、別の理由がある。希望は、だれかに託すと同時に、自身が積極的に関与していくが、自身の営為としてのａは、希望する意志と同一の主体の営みであるから、このａは「希望する」ことに吸収されやすくなる。「ダイヤが希望です」という場合、ダイヤに「あこがれ、うっとりとし」、これを「強く求め欲していて」、「指にはめてみたい」「皆に見せびらかしたい」と思い、「その所有を望む」のである。ダイヤ（W）をめぐるそういう多様なこころの動きを簡略に語る場合、その場面で一番高級で倫理的な振る舞いである「希望する」にまとめ、したがって下賤な欲望をベールで覆い、その欲求の対象Wを「希望」の目的とするのであろう。

しかも、遠大な希望の場合それの達成には多くの過程のあること、つまり、ａの内容は単純ではなく多くの段階・手段の積み重ねからなっていることがある。「裁判官になる」ことａ（W）を希望する者は、その最終目的ａ（W）を描きつつ、このａを具体化して、司法試験合格m_1を中間目的にし、そのために法学部合格m_2を目指し、それにと予備校の試験の好成績m_3を志す。希望の具体化は、裁判官Wになることへの一連の努力になり、ａには$m_1m_2m_3$が連続している。その間、裁判官（W）がつねに念頭にある。任官すること（ａ）のみではなく、厳正な裁判官としての自分を想像してみることもあろう。希望の一連の過程の目的自体は、厳密に

いうとａであるけれども、それ以前のこともそれ以後のことも描かれ、そのなかで変わらないものは、裁判官Wの姿になる。このような場合、希望では、ａよりはWが描かれやすくなり、ａは省略されがちとなることであろう。

（**Ｐを必ずもつ**）希望は、ａ（W）を目的にえがくとともに、さらに、それを希う相手（Ｐ）をもつ。このＰは、第一にａ（W）を実現してくれる行為者である。だが、希望は、傍観的な期待とちがい、自らが努力し実現するものでもある。希望は、Ｐに「託する」とともに自身が「叶える」。自身が叶えていくことが主となっている希望では、Ｐは、一見存在しないようにも思える。「希望は、裁判官です」とか「プール付きの豪邸が希望です」等の遠大な希望の多くは、人頼みではなく、自身が力を尽くして実現していくもので、希うような相手（Ｐ）は必須とはならないようにも思える。だが、希望が、「夢」や「願望」あるいは「志」「志望」ではなく、希望であるのは、ひとつには、相手（Ｐ）をもつことにあるように筆者には思われる。希望というかぎり、「裁判官に自分がなる（のを見守ってくれる）ことを、周囲の者（Ｐ）に、希望しています」「プール付きにする（のを許容してくれる）ことを、家族などの周囲（Ｐ）に、希望している」ということになるのではないか。周囲の者・関係者（Ｐ）は、ここでは、単に許可・許容し見守るものにとどまっているのであるが、それがあるから、希う希望になるのであって、もし、Ｐがなくて自分だけだとすると、それは、希望ではなく、「志す」とか「憧憬する」等になる。希望する限りは、Ｐが何らかの形で意識されることになっているというべきであろう。

（**「二つの希望」－目的としての希望と、意志としての希望**）ところで、希望では、「希望する」こととともに、この希望の働きの対象自体も「希望」という。「まだ、希望が残っている。捜索の継続を希望します」という場合、残っている希望は、実現の客観的可能性のある目標・目的そのもの（目的の人為ａであり、多くの場合、その目的物Wでもある）を指している。事故で地中に閉じ込められた者の生存の可能性、したがって救出の可能性がなおあるとき、その生存者（W）の救出（ａ）という希望の対象・目的（ａあるいはW）を、「希望」と言い、これが「残っている」といっているのである。あとの「捜索継続を希望します」というのは（名詞化すれば、「捜査継続は、命令できる訳ではありません、希望です」という場合の「希望」）、捜索隊に乞い願うこと、依頼する意志としての希望である。

この希望の目標・目的（ａ（W））では、その実現に関して、二つの異なった希望のあり方が問題になってくる。希望ａ（W）をだれが実現するのかという問題である。「希望する」場合の希望では、「希望する」者は、この動詞の主語ひとつ、つまり「希望者」である。だが、目的としての希望の場合、それを担う者は、希望する者のみではない。希望（目的）は、一方では、これを「Ｐに」希望するのであるから、その主体となるのはＰで、Ｐがａ（W）を担うのである。かつ、他方では、期待などとちがって、希望ａ（W）は、自身が実現していくもの

でもある。他力依存と自力中心の希望の違いとなる。他力中心の希望では、希望はそのＰに「託する」ものになる。希望ａ（W）をそれに力あるＰに託し依頼し「希い」その実現を「望む」のである。他方で自己の力を主とする希望では、自身がそのａ（W）を実現していくのであり（Ｐに許容してもらい見守ってもらいながら)、希望は自身が「叶える」のである。

３．だれか（Ｐ）に希う

（**誰に？**）「ダイヤモンドを希望する」「就職を希望する」というとき、ひとは、「なにかに」対して希（こいねが）うという契機をもつが、これは、希望の対象自体、つまり「ダイヤモンドに」希うのではない。まさか、「就職に」希うこともない。その乞うもの、願うものは、別にある。その希望の対象をもたらしてくれる人である。希望は、希望する相手を常にもっている。ひとは、個として独立し自立面をもつが、本源的に社会的な存在であり、他者と協力・共同して生きる存在である。希望は、自身でかなえていこうとする自立性に富み、相手に控え目で遠慮し、その相互の自由・自立を尊重しているといえるが、他面では、同時に、他者に依頼する契機を、希（こいねが）う面をもっている。

希望は、だれか（Ｐ）に、希い望みもとめるのだが、このだれかは、だれでもいいのではない。まず、人間以上でなくてはならない。犬や猫には「希望」はしないであろう。希望の目的のための手段的役割を犬も担うことがときにできる。しかし、犬自体に「希望する」ことはない。「留守番を希望する」とき、頼りないとしても娘になら希望できるが、いくら頼りにできる飼い犬であっても、これに「希望する」ものはいないであろう。

（**希望の理解と実行の能力**）「希望」を自然や動物に託さないのは（日本語ではそうである)、希望というものをその相手が理解できなくてはならないと、希望する者が思うからであろう。自分のは希望であり、命令でも哀願でもないこと、「これは、私の希望であって、命令ではありません。する・しないは、あなたの自由です」というようなことを了解できる相手にのみ希望は通じるのである。だから、犬には無理でも、娘になら、その理解だけはできるから、希望できるのであろう。希望の目的実現までの手段の過程を未来に向けて描き、この手段を自主的に担うといった高度に人間的な能力を相手はもっていなくてはならないのである。希望は、はるかな先に目的を描くことが多い。手段となり、担い手になることは、はるかな先から見てのことで、その目的と手段的なものについての十全な理解と、「希う」ひとへの自主的な応答は、人間的な知性がなくてはかなわないことである。

希望は、単なる願望とちがいその実現が想定されているから、実行力の伴っていることも条件になる。理解できても、そのことについて実行する能力がないのでは、希望するだけ無駄である。「ダイヤが希望です」と言われても、それを購入する資力がない者には、その希望の受け入れは無理である。希望するとき、ひとは、そのことを心得ているから、相手にとり実現可

能なものを「希望」する。お土産には、ダイヤは無理だから「アメジスト」ぐらいにするのである。さらには、その願いを聞き入れてもらえる関係であることも踏まえている。いくら資力はあっても、それがすべてまわしてもらえるわけではない。その能力のどの程度を自分の希望の実現にまわしてもらえるのかということがある。お土産の希望を聞かれた場合、そのことをふまえていて、妻なら「アメジスト」を希望できても、近所づきあい程度の間柄の場合、希望できるのは、「絵葉書」レベルである。

（**倫理的になる所以**）他者に関係なく自分が自身で希望を叶えていくような場合にも希望をいう。これを「希望」として表明するのは、やはり、だれか（P）をふまえてのことであろう。どんな事柄も、社会的存在である人間の場合、周囲の支えがあって可能となることである。それを思うか思わないかは、当人の姿勢しだいである。尊大な者は、ひとの稼いだものすらも、自分の手柄にしようとするし、謙虚な者は、自分が圧倒的に力あってのことでも、「皆さんのおかげ」とする。自身で叶えていくことが基本のものを「希望」とするのは、この点からいうと、当人の周囲への気遣い・謙虚さのなさしめるものということができる。あるいは、自分ひとりですることであっても、謙虚に控え目に、周囲への迷惑などにも配慮して、「ひとりでする」ことのわがままを許してくれるようにと希い希望するのである。

希望では、だれかにこれを求め希うのであるが、それは単純に要求するのではなく、控えめに依頼するものである。相手の自主性にうったえてお願いするのであり、相手に対する配慮に富む。希望は、相手の自由を尊重する。「ここでは、タバコを吸わないように希望します」という場合、「吸わないよう命令します」というのと違って、その対象者の自主性を尊重していて、無理強いはしない。相手が、「吸う・吸わんは、わしの勝手じゃろうが！」といってこれを拒否して喫煙することを容認する、穏やかさ・控え目の姿勢を希望はもっている。相手を慮り、自らの望み願うものを小さめにと制限する。

（**託される者は、周囲の者だが、未来の人たちでもある**）「願望」も願うものだが、一方的で主観的であって、願う相手と情況について何らの配慮をしていなくても、よい。だが「希望」は、現実的であり、そのこいねがう相手についても、これを現実的に限定し明確にしている。就職を希望して希う相手は、特定の企業と特定の関係者になる。ただし、希望の担い手になり支持者となる者（P）は、身近で限定的だといっても、現在の周囲に限定されるわけではない。希望は、はるかな未来に向かって描かれることがあり、そういう場合は、希望を託する相手（P）は、未知の未来のひとともなる。自分のはるかな希望を将来の子孫に託すこともあれば、民族や人類にと希望を託すこともある。希望は、未来に向けてその目的ａ（W）を描くが、その担い手Ｐも、未来の人々にまで広がることになる。

はるかな希望は、その担い手を求めて、はるかな未来の人類へとひろがっていく。未来の人類が頼りになりうると思うから、そこへと希望を大きく広げていくことができる。希望は、単

なる願望や夢ではない。現実に実現可能なものを描く。未来の人類に希望を託せるということは、そのはるかな可能性がこの現在において見出せているということである。こういう方向での希望では、希望を託し「希う」とともに、はるかにと「望む」契機が顕著となる。個を超えて類としての精神に生きる希望は、はるかなかなたをのぞみ見る。

（**絶望では、Ｐは、人に限定されない・・・**）希望が絶たれたとき、絶望する。老舗を継いでくれる（ａ（W））という希望がなくなって、「どら息子（Ｐ）に」絶望する。「自分に」絶望し、「みんな（Ｐ）に」絶望する。だが、絶望の場合は、Ｐは、ひとには限定されない。希望とちがい、自然にも絶望する。日本では「雨を希望する」ことも「雨に希望する」こともできないが、「長雨に絶望する」ことはできる。

根本的な希望が不可能となり未来を剥奪されて絶望するのだが、希望を剥奪するもの、絶望させるものは、人間にはかぎらない。人間の営みを挫折させるのは、周囲の自然条件等によることも少なくない。絶望はつらく、なんとしても回避したいことであるが、それには、絶望させるものを排除することが肝要となる。絶望では、この絶望させるもの・条件に注目する。絶望をもたらすものは、自他の人間にはとどまらない。自然をふくむ「最悪の条件」に絶望することになる。ということで、絶望では、ひとに限定せず、自然をもそののろいの対象（Ｐ）にするのである。

絶望を通して見えてくることは、希望のささえは、周囲のひと（Ｐ）が担ってくれているだけではないということである。人為を越えた自然環境もひとの希望を可能にしてくれていたのである。自然のささいな動きがひとの希望を奪い絶望させるということは、自然が日頃から希望を無言のままに支えてくれていたということである。自分の希望を周囲のひと（Ｐ）に託し、このＰに自分勝手な望みを許容してもらい見守ってもらうのであるが、その直接のささえの背後には、さらに多くのささえてくれている人々があり、恵まれた自然があるわけである。それが、希望を剥奪された絶望からは見えてくる。

４．希望（ａ（W））を望み見る

（**最高のものが希望するもの**）希望の目的となるものは、希な望み、最高のもの、理想である。「希望の大学」は、自分の行きたい最高の大学である。「希望通り」になるとは、何も思い残すことなく満足できる最高の状態が実現されたときのことであろう。ａ（W）という希望の目的において、その価値は、厳密にはａ（W）にあって、Wと同一ではないが、多くは、このWの価値に等しいものとなる。「広大（W）に入ること（ａ）が希望です」という場合は、ａ（W）とWは、いずれにも価値があり、その希望の高い価値は、Wによることになる。だが、ａが「廃止すること」であったとすると、広大（W）に高い価値を認めているものはこの希望には与しないであろう。「狭大（W）を廃止すること（ａ）を希望する」というようなことになろう。

希望ａがWを否定する場合は、むしろ、この希望のもとでのWは、「間違い（W）を改めること（ａ）を希望する」というように、反価値物になるのが普通である。Wではなく、ａが、価値あることがらとして希望するものになる。

しかし、ａがWの価値を肯定的にあつかう場合には、希望の目的とするものは、その価値づけは、ａが高度で稀有なものである場合は別だが、月並みな行為（たとえば、所有するとか、選び出す等）である場合は、希望の目的とし求めてやまないものは、Wの価値になり、希望を呼び起こしている価値あるものは、Wに一致することになる。「広大（W）に入ること（ａ）が希望」では、希望する者は、「入ること」ではなく、「広大」に最高の価値を見出しているのである。もちろん、ａが希望の価値そのもので、Wは並みのものということもある。「体（W）をスリム化すること（ａ）が希望です」では、希望の価値は、身体（W）にではなく、スリム化するという涙ぐましい努力（ａ）にあり、このａが希望の目的とする希な高い価値になる。つまるところ、ａ（W）に希望の最高の価値があるということである。

（**希望の二つの価値秩序**）価値は、一般に、欲求主体がその対象に対して自分たちの欲求を満たすものがある（有用・有益）と評価するところに成立するが、希望の場合も、希望するから、その対象が高い価値あるものとなる。ただし、希望の価値は、単にそういう希望主体の個人の主観的価値にとどまるものではない。一般的にその社会が欲求の対象とし価値あるものとしていることが前提になる。希望は、社会的であるから、それがまずふまえられる（メノウやアメジストでなく、ダイヤの方に高い価値があることになる）。単に「蓼食う虫も好き好き」の個人主観の価値にはとどまらない。とくに、その希望が周囲に希うことの大きいものの場合、その周囲に十分な配慮をする必要があり、その一般的な価値観を共有し前提にすることが求められる。それによって、希望をかなえてくれる相手の努力や贈与をそれとして十分に評価し尊重することが可能となるのである。かつ、同じ社会的な価値秩序をふまえることによって、周囲が許容する限界、つまり自身の望んでよい限界も明確となる。

同時に、個人の希望・目標としては、自身の気に入るもの・好みのものを選択するのでもある。その点では、希望は、客観的、間主観的な価値づけではなく、個人の主観的な価値づけをして、その最高の価値あるものを選択することになる。商品の場合は、多くは、まず、客観的な価値秩序をふまえ、自身に可能な限界を明確にして、その範囲内で、一番主観的に高い価値のあるものを選択することになる。就職の希望の場合は、おそらく、個人的に一番なりたいものを選定して、そのあと社会的により高い価値があると評価されるものを選んで希望とする。希望は、社会的価値秩序と個人的価値秩序をふまえて、最高の価値あるものを選択することになろうが、さらに、希望は実現可能性を重視するから、べつの価値秩序、例えば現実化の難易度等にも目を配る。就職では、縁故が希望の選択に決定的となることがこれまでは結構あった。

（**ひとの自由の営みａ（W）であって、自然必然のものは、希望としない**）期待や願望では、

必然のあるいは偶然の自然現象についても、これをその対象にできる。「明日が晴れになる」ことを「期待」し「願望」とする。だが、これを「希望する」ことは日本語ではできない（英語の希望 hope は、「希望」のみでなく「願望」や「期待」にも手を広げているようで、晴れを「hope」できる）。希望の対象は、みずからが叶えていき、ひと（P）に希うものとして、本来的に人為ａ（詳しくはａ（W））となる。自然必然のものや偶然のものは、希望しようと絶望しようとひとの意志・意欲とは無関係にことを展開していくから、希望の対象にはならない。自分ひとりで夢見るのはかまわないが、希望は自他に相談して決めていくのであり、自然必然のものに抵抗したり、これに人為を重ねて無駄をすることには慎重にならねばならない。希望が対象とする人為ａは、さらに自由意志のもとでの自発的な営為にと限定される。ひとの行為であっても、意志の自由のきかないものは、希望の対象にはならない。希望を受け入れる側（P）に立った場合、「ご希望を承ります」と言えるのは、自分がその希望を叶えることが可能な（つまりその自由のある）場合のみであって、もし、その意志によって叶えられる可能性がゼロと分かっていた場合は、希望を引き受けないはずである。宝くじ売り場で、最後の番号が３のくじは希望できるが、当たりくじを希望することはできない。前者は自由になるが、後者は、自由のきかないまったくの偶然に属することだからである。

希望の目的ａ（W）では、ａが自明である場合は、これを省略して、「Wを希望する」というが、このW自体は、自然物であろうと偶然のものであろうと希望の対象となる。Wについては、希望は、ａ次第でなんでもいいうる。希望は自由の営為のもとにあり、「あした太陽がのぼる」必然も、「あした曇りになる」偶然もそれ自体は、自由にならないから希望の対象ａにはならない。必然も偶然も希望者の願いには無関係にことを展開するから、日本語では、これらを希望することはない。しかし、それらをWとして、「太陽ののぼる」ところ（W）をサングラスなしでは「見ないよう（ａ）に希望する」とか、「曇りになる」かも知れない空（W）を、出来れば「写真にとること（ａ）を希望する」ということはできる。「見る」も「写真にとる」も、自由な人為のことがらで、希望として可能なことである（希望のこの必然・偶然を排除した自由の「可能性」の諸相については、拙稿「希望とその可能性－主観的願望から確かな希望へ－」（広島大学倫理学研究会『倫理学研究』第１８号　２００７年）を参照ください）。

（**希望は目的論的展開をし、期待は因果論的展開にとどまる**）希望の対象・目的となるものは、人為ａであれ、それが実現していく理想の価値物Wであれ、現在は、実現されていないものである。その希望をいだく現在からは、はるかな先にあるのが希望の対象である。希望は、まずその未来の目的を明確にし、つぎにその目的からその現在の手もとまでの諸手段の系列を描き、これを逆に、実在的に、手もとの手段（因）からはじめて目的（果）まで一歩一歩因果系列をたどっていく。身近な希望は、はるかなさきではないが、それでも、身近な未来に、なお今は見ることのできない目的を描くことからはじめていく。現在の手段―未来の目的という目的論

的展開をどの希望ももつ。

動物には、希望はない。希望のような目的論的な展開をその生の基本形式とするのは、人間だけであろう。期待は、犬にもよく見られる。散歩の気配がすると、それを期待してしっぽを振って待ち構える。期待は、因の生起をもって、それに密着して継起する果を想像しこれを見込むだけの因果論的展開にとどまる。チョウは、花が咲けば、蜜を期待してあつまる（ふつう、こう言うのだが、昆虫がはたして「果」を想像し見込んでいるのかどうかは、分からない。が、犬はおそらくは、果を見込む期待の能力をもつ)。犬などになると相当に多彩なことを期待するが、その犬にすら、希望はない。はるかな希有の目的（希望）を描き、これを周囲に希い、現在をその手段と自覚してその生の歩みを進めるのは、希望をもつことができるのは（したがってまた、絶望するのも)、人間のみであろう。

希望において、現在を未来の手段（因）として、その手段の系列を現在からその希望の目的（果）まで動かしていくのは、もちろん、ａ（W）目的自体である。その希望の目的が、ひとを引き付け、そこへといざないつづけていく。目的論的展開では、かりに、ひとつの因果の道がとぎれた場合は、終局の希望の目的（果）から再度、別の道を見出してその現在に別の手段（因）を手もとに見出していくことになる。希い望む相手（Ｐ）が変節して希望を受け入れてくれないようなときも、その希望内容・目的がそのひと自身に限定されない場合、そのひとを去って別の者に希望を託すことになり、その新規のひとに希っていくことができる。その目的が理想として存在するかぎり、希望は、ひとを引き付け、その実現へとさそいつづける。

はるかな頂上にいたるに、ふもとで、大きな登山口があるのを見て、すぐ頂上への道と思いなすのが期待になる。これに対して希望は、まず、頂上をのぞみ、そこから、ふもとへの道を目で追って遡源し、「迷路」を出口からたどって入口をさがす要領で、ふもとと結ばない脇道を避けて、確かに頂上まで続いている登山口を見つけ、これを選んで一歩を踏み出していくのである。

５．はるかな希望

（**希望の二つの理念型－ささいな希望とはるかな希望**）絶望のなかに見出すかすかな希望や、夢と希望にかがやく青春の希望は、「和食を希望します」というような希望とは異なる。はるかな希望である。希望が人生論で通常話題になるのは、このはるかな希望の方であろう。愛に、卑近な愛欲があり崇高な仁愛があるように、希望にも、卑近なささいな希望と、はるかな根本的な希望の二つが理念型として挙げられてよいのではないか。

冒頭にあげた「水を希望する」ときの希望は、卑近なささいな希望である。それが卑近でささいなのは、希望が、他方で、遠大なもので、そのひとの人生にとって決定的なものになっていることがあるのに比してである。この卑近な希望が単なる要求などでなく希望であるのは、

その希う姿勢、相手への謙虚な依頼の姿勢においてであろう。その「望」むものは自分には「希」有の価値あるものになると捉えて、身を低くしてこれを「希」う、その姿勢自体は、ささいなどうでもよいことではない。それは、人間関係にとっては大切な慮りある態度である。「水を要求する」というような不遜な態度とはちがって、謙虚に遠慮がちに希っているのであって、ささいな希望も、倫理的には高く評価される態度でありうる。

ささいな希望とはるかな希望のちがいは、それの否定がなにになるかで判断できる。朝の食事についての「和食の希望」は、ささいである。これが否定され洋食にされても、たいしたことはない。せいぜい軽く「失望」するぐらいである。だが、「青春の夢と希望」「生存の希望が残っている」等の希望では、その反対・否定は、深刻なものとなり、その典型は「絶望」となる。その否定が深刻なものとなる希望は、そのひとの生にとり大きな根本的な希望である。

はるかな遠方にのぞむ希望は、重大な根本的希望であろう。ささいなものなら、そんな先のことなど気にかけないからである。しかし、身近な希望は、かならずしも、ささいな希望ではない。結婚の希望や受験の希望は、身近にあって人生を左右する重大な希望であり、その挫折は、しばしば「絶望」となり、深刻なものになりがちである。はるかな先の希望は、はるか遠方にあるのだが、現在の自身を方向付け、現在の存在そのものをつくっている点、現在の根拠をなしているのだともいえる。教育者や医者というはるかな希望の未来が、現在の教育学部生、医学部生を存在させる。その未来が閉鎖された場合は、そういう学部生であることは空しいものとなる。ささいな卑近な希望は、「和食の希望」のように自身の存在そのものにとってはどうでもいいもので、自己自身にとっては遠くに位置している希望である。だが、はるかな希望の方は、自己の根源を形成して、現在の間近にあって反復想起される親しいものである。

（**未来の希望が現在を生きたものにする**）希望においては、その価値ある目的、その希有の望みを充たすものは、今は無い。その欲求は、不充足で不満の状態にとどまっている。その無の点では、絶望と変わるところはない。絶望とのちがいは、未来についてである。希有の価値あるものの実現の可能性が未来にあり、そこへと道の開かれているのが、希望であり、絶望では、その未来が存在せず未来の扉はかたく閉じられている。同じ無の現在でも、未来への扉が開かれているか否かの違いは大きい。ひとは、あすのために、未来に目的をかかげて、その生をあゆむ。その存在の本質は、そのめざす未来にある。この未来の希望を奪われた絶望状態は、その生を無意味化してしまう。絶望において、人間的生は陰鬱のうちに停滞し、精神的な死という辛い状態に閉じ込められる。希望は、その反対で、未来をもち、したがって、ひとの精神的な生は、その発揚の場を得る。

希望のもとで、未来の価値ある目的・観念が現在の無・不充足にひとを耐えさせる。未来の希望の目的が現在を有意味の手段とし、その未来へとこれを駆り立て、現在を生きたものとする。今日の苦労は、あすの享受の根拠・因をなすのであり、実りをもつものとして、充実した

ものとなる。あるいは、未来の価値あるものが現在の自分を魅了してそこへと誘ってやまないのが希望であり、それに一歩一歩近づく手立てが、今日の苦労において与えられるのである。希望の未来がおいしいものを享受する「口」だとすると、現在はそこへと食べ物を運ぶだけの「手」である。口が楽しむのを手(手段)は、ひたすらに助けるのみである。だが、希望の主体は、その手と口の全体をひとつにした自己自身であり、その口を楽しみとし、その手の働きに心地よさを感じる、生の諸層を統括する高次の精神である。

（**身近にのぞみ、はるかをのぞむ**）未来を望みみることで現在の意味は変わる。希望の輝きに照らされて、未来に生きる現在となる。希望は、まずは、その未来の目的を観望する希望である。その知によって、現在がその有意な手段としての価値を獲得する。本稿冒頭で「水を希望する」のは、観望することなどではないといったが、希望は、高遠なものになるほど、まずは観望にはじまる。希望の「望」は、ないもの（「亡」）をはるかにのぞみ見るものである。そのはるかなものの観望をもって、その先導をもって、ときに絶望し無意味になっている現在をよみがえらせる。生きていこうという気力を再生させる。この現在に耐え（それは、希望のための現在以前の、絶望の現在であるかも知れない。絶望の試練は新しい希望を生み出す発条になりうる)、その苦難を糧にし、これを積み立てて、その苦の数だけ、希望の実現は近づく。ひとは、希望において、現在(手段)から未来(目的)に向かい、現在に直接するだけの生を超えて、人生という全体的な精神に生きるのである。

希望の「望み」は、その目的を希い「のぞみ」求め、はるかを「のぞみ」見るのであるが、同時に、現在の人生をつくっている点では、現にここに「のぞむ」臨在するものとなっているのでもある。希望は、現在の自身を方向付け現在の自己をつくっている。その希望のうちに、自身と周囲の者は、その未来と現在の根源をなすものを、「のぞき」見ることになる。希望できるがゆえに人は絶望もするが、その絶望の閉じた扉を開くのは、堅実な未来を描く希望である。希望は、絶望をとり「のぞ（除）き」（あるいは、絶望に耐える中でおのれを「のぞ（覗）かせ」、はるかを「のぞ（覘）き」「のぞ（望）み」見て、今に「のぞ（臨）み」、その生をよみがえらせる。そういう「のぞみ」をもって、希望は、未来へと飛び立つのである。

What is hope?- beg and wish-

Yoshiki KONDO

KIBOU(hope in Japanese) is not a physiological desire, but a social demand. And this demand is not one-sided claim but a polite wish and a careful ethical request. KIBOU has two Chinese Character, KI and BOU. BOU means “wish” or “request”. KI means on the one hand KOINEGAU(beg, ask), and on the other hand MARE(rare, uncommon). Then KIBOU(hope) means “politely wishing(begging)” and its object has “rare” high value.

KIBOU-SURU（hope in Japanese verb）has the high valuable direct object of hope, and also the indirect object(P) as the person whom man begs. “P” in the hope is the person of surrounding, whom man wishes to understand and support his hope. Also in the case that man realizes his hope independently by himself, man has his neighbor. And in this case the man of hope(KIBOU) may suggest his courteous request modestly, “Please permit me to do only by myself”. That is the Japanese KIBOU(hope).

Usually man takes up only “W” as the rare high valuable object of hope, but strictly must adopt “a(W)”(a=the conduct of human, W=its object), for example, “to possess(a) the camera(W)” or “I become(a) a teacher(W)”. If “W” is negative-value, for example “dirty matter”, which can not be the object of hope, man must say in his hope “to exclude W” i.e. “a(W)”. The object of hope i.e. “a(W)” is realized by the man of hope and other persons voluntarily. The “a” of KIBOU(hope) exists in human spontaneous conduct, so must not be natural matter. In English man can say, “I hope it will rain tomorrow”, but any Japanese can not say so in his hope(KIBOU), because rainfall is a natural matter.

（『広島大学大学院文学研究科論集』　第６７巻　２００７年１２月）